特集・都市とイベント❷

イベントと行政

都市の魅力と活力の創造のために

産形靖彦

一――イベントと都市の魅力
二――都市におけるイベントとは何か
三――科学万博が遺したもの、そして地域のCI
四――イベント行政と横浜

一――イベントと都市の魅力

「コンベンションを招致する上でいちばん大切なことは、何といっても都市自体が魅力的であることですね。」開口一番、テキサス州サンアントニオ市の都市計画官、ハーブ・ミュラー氏はこう語りはじめた。

サンアントニオ市は人口およそ八〇万余、人口ランキングではアメリカでベストテンと一一位の間を往ったり来たりしている南部の都市である。テキサスは南部の中心を占め、広大な土地と、いわゆるサザン・ホスピタリティーに富む風土とをもっている。まるで山手線の内環ぐらいありそうな巨大なダラス空港から一時間のフライトでこの都市に入ることができる。つまりサンアントニオは、東部や西部に位置する大都市というよりは、明らかに地方都市の風貌をもっているのである。そのローカリティとは、われわれにもっとも馴染みのあるものでいえば、デビィ・クロケットが活躍したアラモ砦の戦いに代表されるように、南北戦争やらメキシコとの争いにみられた、あの赤茶色の大地である。ごく最近までは、近代的な産業といえば、軍事関連の施設などがあったに過ぎない。

こうした地方都市にとって、イベント行政とは一体どのような意味をもっていたのであろうか。本題を解くひとつの糸口として、近年コンベンション都市として頭角をあらわしてきたサンアントニオ市のケース・スタディを横眼でにらみながら、論をすすめてみたいのである。

イベントと地方行政と一口にいっても、自治体が中心になってイベントを積極的に主催し、世界各地から物産や人びとを集めるやり方もあれば、コンベンションにふさわしいハードウェアを十分整えておいて、その実施をさまざまな形でサポートする方法論もみることができる。サンアントニオ市のケースは、どちらかといえば後者に該当するといえるだろう。一体サンアントニオはコンベンション都市として、どのような軌跡をたどってきたのであろうか。

テキサスは一見荒地で水のないところのように思える。しかし、このサンアントニオ辺りに

は、地下水脈が縦横に走っていて、至るところにクリークをみることができる。あのアラモ砦の近くにも、いくつかのクリークが存在しているのだが、かつてはこのクリークがしばしば氾濫して暴れることが多かったらしい。行ってみると、驚くほど小さな水路なのであるが、周辺の住民にとっては悩みの種だったのである。このクリークの川畔には、レストランやちょっとした商いをする店などが散在していたが、しばしば水害のために酷い目にあっていたようである。

しかし、このような嫌われもののクリークではあったが、水そのものが人びとの心をなごませるものであることは洋の東西を問わず変わりはない。市当局者はこのクリークを思い切って利用することを企図したのである。ハーブ・ミュラー氏のいうところの「都市の魅力」のポイントを、このクリークに求めたのである。

このクリークの水量をコントロールし、かつ水質をクリーンに保つことが検討された。その結果、クリークの一部のレイアウトを変え、幾つかの堰が設けられた。浄化装置の設置も積極的に実施されたし、下水道のためのバイパスをつくり、水質保全に力が注がれた。堤防というほどではないが、えん堤もコンクリートで造成され、決壊しない強固なものになった。水量コントロールが十分に行われたために、川畔の散歩道が一年中フルに活用することが可能になった。

これらの作業全般は、市当局を中心にした河川委員会（リバーサイド・アソシエーション）がこれにあたり、公共的な立場から、あらゆる関係セクターとの調整が行われたことはいうまでもない。サンアントニオはその名にも示されているように、メキシコ系の文化が色濃く漂っている。マリアッチと呼ばれる陽気な音楽がその代表的なものであるが、クリークを中心にしたこの新しい街区「リバーウォーク」にはしばしばこのマリアッチが流れるようになった。テキサスの中に水の都が誕生したのである。

クリーク沿いには緑が植生され、数多くの花壇がつくられた。ヒルトンなどの一流ホテルも、クリークを見降ろす景観の良いロケーションに建てられた。メキシカン・フードからフランス料理までの、数多くのレストランが川面をみつめている。川畔の散歩道には、イスとテーブルが並べられ、観光客やコンベンション参加者のみならず、市民の格好のそぞろ歩きで賑わっている。

毎夜、川畔の一角につくられた野外劇場でいろいろなパフォーマンスが行われている。この毎夜行われる小イベントのシリーズは、さきの河川委員会が中心になって企画・実施運営されている。主としてマリアッチ・バンドによる歌と演奏であるが、川を挟んでステージと観客席があり、時には川に掛かる石橋の上がステージになる。夜になると、川面に映えるイルミネーションが実に鮮やかで、マリアッチを聴きながらの食事が人気の的になっている。

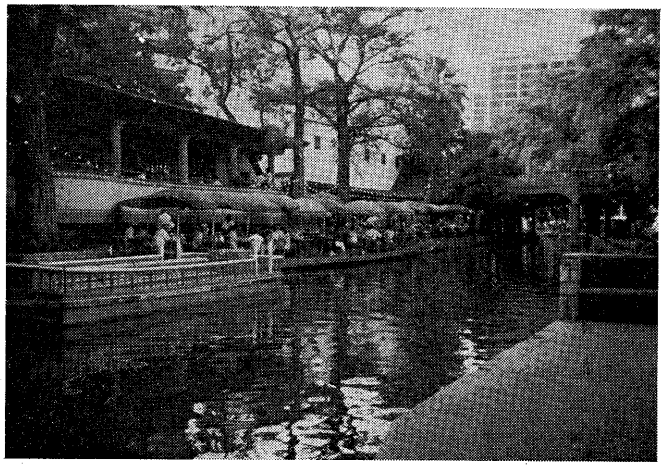
さり気ない街区のさり気ない一角が、ちょっとしたアイデアの積み重ねによって、それこそ世界に冠たるスポットとして、いま注目を浴びているのである。

また、この区域から歩いてわずか数分の距離にアラモの砦があり、一九六八年に博覧会が開催された跡地にあるタワー・オブ・アメリカをみることができる。さらにはショッピング・スポットとして、メキシコ文化を伝えるラビータ地区が再開発され、多くの人びとで賑わっている。そして何よりもこのサンアントニオの財産になっているのが、市が管理・運営するコンベンション・センターである。船乗りこみよろしくクリークからコンベンション・センターの一角に入ることができる。実はクリークが市街地より一段低い所を走っているために、コンベンション・センターの建物が、ユニークなフロア取りで構成されているのである。クリークの景観と雰囲気を味わいながら、参加者は船上の人

となって、既にコンベンションが始まる以前から、サンアントニオの虜になってしまう。都市の魅力、そのエンタテイメント性が人びとをして参加してよかった、という気にさせるのである。

サンアントニオ市におけるコンベンションの開催は年間一、〇〇〇件を超える。たまたま私が訪れた七月初旬の一日は、ブリッジの国際大会が大ホールで開かれ、三、〇〇〇人が世界各地からやってきていた。この大ホールのほかに、中小のホールをもち、またセンター内には一三、〇〇〇人余を収容することができるアリーナがある。このアリーナでは、メキシコ国境に近いためか、闘牛もあるし、観客動員にすぐれたプロのバスケットボールの公式戦も行われる。

写真—1　リバーウォーク（サンアントニオ川）



このように学会から見本市、さらにはスポーツ、音楽イベントに至るまで、あらゆるジャンルのイベントを可能にするコンベンション・センターは、サンアントニオ市に、実に多大な経済的インパクトを与えているのである。年間の来訪者がもたらすその経済収入は五五〇万ドルといわれている。

さて、このサンアントニオのケースは一体何を意味しているのだろうか。まず第一には旧来から残されている歴史的なインフラストラクチュアを活性化した、という事実ではないだろうか。都市の魅力の最たるものは、長い風雪の中で生き残った優れた文化とその所産に過ぎるものはない。超近代的なハードウェアの魅力も捨て難いが、人間の英知によって研ぎすまされ、伝えられてきたものに、近代的な装いを加味したものこそ、人間の温もりが感じられるものである。その温もりが、人びとに安息を与えるのではないだろうか。伝承されてきた文化には、常にイベント性があるものだ。イベントとは、レギュラーでスケジュール化されたものである。従って旧来のインフラストラクチュアを持つ都市こそ、イベント都市としての要素がすべて包含されているといえよう。

第二には、市民レベルの共感を得た開発である、という点である。河川委員会には市民代表も参加しているし、川畔の住民や出店者・企業の前向きな協力が得られていることは見逃せない。

第三にはコンベンションの誘致に、市当局が大きな貢献をしていることである。全米市長会の副会長もつとめているという三〇歳代の若いシスネロ市長を核として、エネルギッシュなコンベンション招致運動が行われている。センター自体にしても、大型のコンベンション・イベントを可能にするために、収容力向上のための増築工事や改修が熱心に行われてきた。

第四にはコンベンション用の周辺、ないし付帯設備や機能の充実が挙げられる。ホテルの増設や空港、高速道路網の整備などがそれである。

第五にはバイオ関連企業などの、先端技術産業の誘致の成功である。これは近代都市にふさわしい、無公害型の産業分野であり、ともすれば軍事関連の産業に偏りがちであったサンアン

トニオ市に新しいイメージと息吹きとを与え、市民からも歓迎されている政策である。

第六にはボタニカル・ガーデン（植物公園）のような、テキサスの気候風土を生かした観光施設の充実である。コンベンションなどのイベントに参加する側のニーズは、コンベンションそのものが目的であっても、その開催地がさまざまなエンタテイメント性に溢れていることが参加意欲につながってくる。アフターファイブの自由時間を快適にすごせるかどうかが大事なキー・ポイントになってくる。

世界的に著名なコンベンション都市であるハワイやラスベガスなどは、施設や景観がユニークであるだけでなく、その都市にしかない魅力がある。ハワイには海という類い稀れな資源があるし、ラスベガスは周辺観光の基地であると同時に、カジノやショーなどのエンタテイメントが素晴らしい。しかもこれに加えてショッピング・センター的な機能として、あらゆる商品・商店が集まる一大ショッピング・モールを持っている。旅に出ての買物好きは、必ずしも女性だけの特権ではないようで、コンベンションの行われる都市で、一流の商品・商店に出逢うことは誰しもが喜ぶものであり、こうした傾向は世界共通である。ハワイにも、ラスベガスにも、またニューヨーク、シカゴ、アトランタやヒューストンにも実に巨大で一流のショッピング・モールが存在する。この点でいえば、サンアントニオは今一つ欠けている、といえようか。

二――都市におけるイベントとは何か

イベントとは一体どのような意味をもつものなのであろうか、いささか古い例を引きだすようであるが、世阿弥の「花伝書」の中に、一に新しきもの、一にめずらしきもの、一に楽しきもの、というくだりがある。この三つの定義は明確にイベントのコンセプトを表現していると思うのである。

都市を構成する要素を「ヒト」「モノ」「情報」であるとするなら、それらの三要素を一つに集約し、かつ生（ナマ）でそれを実現するステージがイベントである、といって差し支えないであろう。そのステージで、一に新しき、一にめずらしき、一に楽しきことが行われてこそ意義がある。

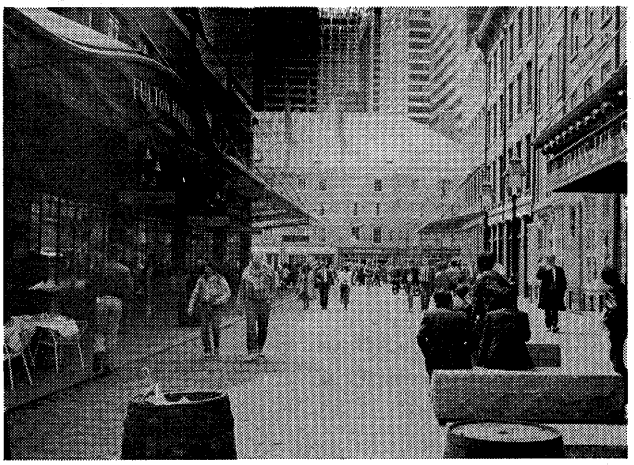
戦後のわれわれは、ひたすら欧米に追いつけ追いこせという国民的コンセンサスをもって臨んできた。その結果、経済、科学、技術などの分野で、ほぼ併走できるところまで脚力がついてきたといえよう。少しく豊かになった部分とは、いうまでもなく生活基盤的なハードウェアである。モノの充足も十分なところまで来るに至っている。こうした状況下で人びとは一体何を求めているのであろうか。欧米という先行ランナーがいなくなって、そのゴールも、走行スピードも、走路についてさえも試行錯誤し走り続けなくてはならないのが現代である。スピード・コントロールとバランスのよいフォームで走ることが、成熟社会のライフスタイルのようでもある。

もう一つ現代を語るときに看過すことができないのは「人生八〇歳時代」、すなわち日本人のライフスパンである。われわれ誰しも、選択する余地なく人生八〇年を迎えるようになった。八〇年を時間で換算すると七〇万時間をカウントすることができる。この七〇万時間から、仕事や学業、さらには睡眠時間などを控除しても、なおかつ三〇数万時間の「自由時間」をわれわれは享受する。この極めて豊饒な自由時間を、もはや余暇時間と呼称するわけにはいかないのである。モーレツに学び、モーレツに働き、必死に生活と闘った挙句に残された僅かな時間とは異なり、自らの意思で自由にライフスタイルを創造することができるのが自由時間である。人びとはこの自由時間を十分に認識し、常にワンランク上のライフスタイルを希求

する行動に出ている。

こうした環境下では、メディアによって伝えられる二次情報よりも、自らの意思で現場に赴き、生（ナマ）情報に接することを好んで志向するようになる。つまり、他人の手が加わったものでなく、直接に情報接触を試みるという原体験を通じて、自らの意識や価値観を醸成していくのである。おそらく、イベントを創りだし送り出す側も、それに参加する側も、この原体験生情報至上主義が、今や国民的コンセンサスになっていることに皮膚下で反応しているに違いないのである。従って都市におけるイベント行政も、旧来のパターンの繰り返しではあきられてしまうことになる。人びとの創造性に訴求するような企画と運営を心がけなければ、人を集めることはできない。

写真―2　サウスシーポート（ニューヨーク）1985・4



ニューヨークのサウスシーポートの再開発の成功は地域計画担当者の間でつとに名高い。このサウスシーポートの成功した原因の一つに、この地域のアイデンティティとしての、イベントがあることを指摘しておきたい。このサウスシーポートは、その名の通り港である。この界隈はかつての発展の跡をろくに留めずに、この十数年来、荒廃するに任されていた。多くのビルは廃虚と化し、治安が悪く、ろくに人の寄りつかない場所になっていたのだった。マンハッタンの南端で、ウォール街の東側に位置し、横浜でいえば中央市場のような鮮魚の市場も近接していた。この荒廃した一角を、かつてのアメリカの建国時代の港の雰囲気に戻そうという運動が行われだしたのはごく最近のことである。赤レンガの倉庫や工場を生かし、新設ビルもイメージを統一して見事に旧市街が復活したのはこの一～二年の話である。フルトン・マーケットという名でのショッピングセンターが中心に位置し、ビル内にはサウシーポートのキャラクター商品からシーフード・レストラン、カフェバーがあり、赤レンガ造りのロフト風モールには、ファッションからバーまでの、多種多様な店構えをみることができる。フラワー・ショップなども広場の一角に、わが国でいえば大八車のような形のワゴンとなって出店している。電話ボックスから街灯、石畳などの装置も、古き良きアメリカ時代のそれである。

高層ビル街に囲まれたこの一角は、従って巨大なビルは存在しない。頭上にのしかかるような高層ビルがないと、青空が豊富に人びとの上にふり注いでくる。空間という言葉がピッタリ似合うようになったサウスシーポートに人が集まってくるのは不思議ではない。なるほど、平日の昼でもこの辺りは人でごった返している。ランチをとるビジネスマンやＯＬに混って、外国人の観光客や他州からやってきたと覚しき人びとが目立つ。しかし、彼らを魅きつけているものは、そして特に地元のニューヨーカーに何度も足を運ばせているのは、ここで挙行されているイベントである。小演劇、トーク、音楽、アート・エキジビジョン、シンポジウムなどサウスシーポートのアイデンティティとしてふさわしい演目がメニューに入っている。知的でアメリカ的なカルチュア・スポットとして、実に丹念で気配りの行き届いたイベントがシリーズ

化されている。人びとは古き良きアメリカに浸りながら、知的な刺激と楽しい語らいという交流のステージに参加しているのである。行政当局がこれらに数々のサポートをしているのは、いうまでもあるまい。

三――科学万博が遺したもの、そして地域のCI

この九月で半年間の科学の祭典は終わった。有料動員数が二、〇〇〇万人を超えた一大イベントであった。「人間・居住・環境」という、抽象的なテーマを先端科学で味つけをすると、しかも大量動員に結びつく仕掛けを行うとなると、大型画面を利用した映像フェアに収斂してしまうのは、まさにむべなる哉、である。しかし、このテーマをよくよく観察してみると、各パビリオンとも、テーマ分解には意欲的で、一見映像フェアにみえながらも、科学のショーケースとして、実に多様なイベント展開がなされていたことに気づくのである。三〇余ものパビリオンが、同テーマで覇を争うわけであるから、プランナーとしては死にもの狂いでテーマ分解を試みた、というのが本音であろう。その結果、トマトの大樹からコンピュータ・シュミレーションまでの、エンタテイメント性溢れる科学フェアになった。一方では先端科学を扱えば扱うほど、その陳腐化の速度もまた早いわけで、企画段階で中止になったプランも数多かった。つまり、科学情報の伝達速度と六カ月の会期との闘いでもあった。

何故二、〇〇〇万余の人びとが筑波に集結したのであろうか。さまざまな分析が試みられるであろうが、極論すれば、われわれの意識の根底にある「一ランク上のライフスタイル」を希求することが、科学のショーケースへの期待ではなかったろうか、と思うのである。前述した自由時間の存在にしても、創造的なライフスタイルにしても、現在の日本人の精神文化にとって、必要な社会的装置の位置にまで、あの科学万博は昇華し得たのではないか、と考えるのである。換言すれば、単なるエンタテイメントというより、一九八五年度における日本人の「日常」のレベルにまで科学が降りてきた観がしきりにするのである。科学という二文字を大事に飾っておくことをしないで、生情報として実感することが二、〇〇〇万人のライフスタイルになったのではあるまいか。

地域性からみた科学万博は、茨城の平野の一角で、知る人ぞ知る存在であった筑波という人工の研究学園都市に対して、二、〇〇〇万人の息吹きが与えられ、遠い都市から日常生活圏にある都市として認知されたことになる。モデル都市づくりの一環としての研究学園都市の好イメージが形成され、行政のみならず民間デベロッパーの手によっても、ミニ筑波が発想され、実現されていくだろう。一言でいうなら、跡地利用は限られたものでしかないにせよ、「イベント・オリエンテッド」な街づくりの試みとして、その遺した財産は計り知れないものがある。人を集め、人を安息させ楽しませ、それらに利用したハードウェアを、次の時代に継承していくことは、そこの地域住民にとって〈世界に冠たる〉無形・資産となるわけで、地域のアイデンティティとして、これに如くものはないのである。しかし同時に、大半の施設やインフラストラクチュアが六カ月後に撤去されてしまうという一過性のイベントとしては、いかに国家予算に多くを依存しているとはいえ、効率が悪すぎはしまいか。跡地利用の長期計画との連動がみられない以上、今後もこうした形でのイベントが地域で展開されることは構想し難いと思うのであるが――。

四――イベント行政と横浜

三〇〇万都市でありながら、横浜は一体どんな顔（プロフィール）をもっているのであろう

か。それこそ〈世界に冠たる〉シンボリックなものを、いくつ持ち合わせているだろうか。大都市東京と近接しているだけに、京浜という形でともすれば同体としてみられ勝ちである。その事実に対して、昼間人口は東京へと移動してしまうだけに横浜市民の多くが疑義をさし挟まないように思う。つまり、横浜という市民意識が非常に薄いのである。然らば横浜の個性をどこに求め、どのようなアイデンティティを確立していけばよいのであろうか。

横浜にあって他所にないもの、これを創造することが先決である。それは新開地に超近代型のハードウェアを据えつけることではない。むしろ旧来のインフラストラクチュアを生かしながら、その温もりや息吹きを失わずに活性化することに尽きよう。しかし旧来のものに対する市民の関心を喚起するためには、そこに足を運んでもらわなくてはならない。イベントの意義がそこにある。

イベントとは、開催を日常生活圏で行いながら、「異次元」のときめきをクリエイトできるものでなくてはならない。しかも単発一過性型でなく、連続・長期的なビジョンをもたなくてはいけない。とくに地域のアイデンティティを確立しようとするには、一層連続性をもつ必要がある。

同時に、横浜らしさ溢れるシンボリックな施設が不可欠である。「みなとみらい21」計画が市制一〇〇周年を控えて、多様なメニューを企図しながら進行しているだけに、この地区でのイベント・プランの成否が横浜の将来を大きく左右するような気がしてならない。

横浜にやってくる外国人と、他自治体からの観光客数はどれ位になるのだろうか。彼らは横浜を目的として訪れるのか、それとも複数の訪問地の一つに位置づけられているに過ぎないのか。かつて、都市のシンボリックな施設とは、パリのエッフェル塔、ニューヨークの自由の女神でこと足りていた。しかし現代の都市のシンボルとは、一つの記念碑的な建造物でなく、それらを取巻くソフトウェア群である。ソフトウェアとハードウェアの位置関係が逆転してきている、といってよい。

横浜市民が横浜を誇りとするに足るソフトウェアとはどの領域であろうか。横浜の外的イメージは港であり海外交流であり、それらに関連した実績も多くある。けれども「横浜発」のソフトウェアは、まだまだ少ない。

例えば、日本の現代アート、とくにグラフィックやインダストリアル・デザイン、ファッション、建築、映像ソフトなどの領域は、伝統性と先進性をもつものとして、わが国が世界中から注目を集めつつある。これらに関連するソフトウェア・情報の発進ステーションとしての機能をもつことなどが考えられる。この発信機能としての柱にコンベンションを位置づけることができよう。コンベンション・センターという建物が必要なのではなく、先ず横浜という魅力ある都市があり、宿泊、交通、観光、ショッピング、エキジビジョン施設（見本市、会議、展示などを含む）が整備され、安全で快適な空間と温かい人情があればよい。施設は一カ所集中が確かに望ましいが、アクセスに問題がなければ、市内に分散して一向に差し支えないだろう。開国以来、外国文化の導入路として果たしてきた役割を、さらにグレードアップして世界が注目している現代アートを糸口にした「発信」機能を、ぜひとも持ちたいものである。とりわけ、映像ソフトの分野は、いわゆるニューメディアやコンピューターとの関連において、最近急速に発展しつつあり、この領域のコンベンションはアメリカとヨーロッパにはあるが、わが国にはいまだ存在していない。ここでいうところの映像ソフトとはフィルム（CFから劇映画まで）、コンピュータ・グラフィックス（CAD／CAMからアニメまで）ビデオ、ビデオテックスなどを指す。大型映像から家庭用テレビまで、ソフトの裾野は非常に広く、ファイン

・アートからコマーシャル・アートまでの多様なジャンルは、専門家から一般市民まで、あらゆる層の関心を集めることが可能である。

以上は、あくまでも一つの例に過ぎないが、少なくともアート領域に関する世界有数のコンベンションを創設する気運、マーケットは十分あるように思う。こうした具体的なケースを想定し、イベント・オリエンテッドな街づくりが試行されるべき時期にきているのではあるまいか。アートに限らず、新聞報道にあったようなF1レースのようなスポーツ・イベントも、十分考えられるであろう——。横浜がアート関連情報の発信地として機能するようになれば、市民や周辺住民の消費行動にも大きな影響を及ぼし、消費の圏内定着がすすんで地域経済に好結果をもたらすことになろう。

<株式会社電通営業企画局企画部長>